

【コメント】「江戸時代の政治・イデオロギー制度における神道の地位」に関するコメント

著者	加藤 善朗
雑誌名	公家と武家 その比較文明史的研究
巻	22
ページ	330-331
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	http://doi.org/10.15055/00002847

【コメント】

「江戸時代の政治・イデオロギー制度における神道の地位」に関するコメント

加藤 善朗

種智院大学

マセ教授の提唱された3つの軸、すなわち権力の正統性を保障する宗教、社会の安定を期すスタビライザとしての宗教、他の宗教を排撃する宗教という3つの視点は近世社会を分析する上で、きわめて有効であると確認いたしました。

先生がとりあげられた神道文献は、近年復刻整理が進んでいますが、いまだテキストクリティクが充分とはいえません。たださえ秘伝書類のたぐいが多く、とくに吉田神道に関する文献は、多く偽書や禁書であり、資料的な困難をのりこえ文献を博搜し詳細な考察をされましたことに衷心より敬意を表します。私がやっているのは図像学で日本中世の仏教絵画の遺品の分析を通じて、そこに描かれた民衆の心性史をあきらかにしようと勉強しています。したがって時代も研究領域もことなり、有効なコメントをするのに十分な専門的知識を持ち合わせておりません。が、以下3点のみ、私の関心事にかぎって印象をのべさせていただきます。

1

もともと習合的な性格を持つ日本の宗教について、神道だけを研究対象として政治と宗教の問題をあきらかにすることができるかという疑問です。

よくいわれるジョークに、日本人は70パーセントが仏教徒、60パーセントが神道信者などと言います。先生にコメントするため私も神道関係の文献や論文を読んでみた結果、私が純粹の仏教徒ではなく、純粹の神道信者でもないということがわかりました。僧侶である私も、あとの30パーセントの部分に属しているのでしょう。吉田神道の文献『唯一神道名法要集』『神道大意』『日本書紀神代卷抄』を読んで感じたことは、密教經典や陰陽道関係の引用が目立ち、これが吉田神道の聖典かと信じられないという印象をもちました。私が日々唱える願文とあまりへだたらないと感じたからです。

平田篤胤は『俗神道大意』巻三に吉田神道の行事について「鳥居に白布でまとい、櫓を櫓に取り替え神道の行事となづけ」て、真言密教の行事や思想を盗用したものであるという意味のことを述べています。この批判の可否は検討を要するとしても、吉田神道の教義的特色は、実際の儀礼の中にどの程度あらわれるものなののでしょうか。それが権力との軋轢のなかで社会問題化するとすれば、吉田神道のどのような思想部分に胚胎していると考えればよいのでしょうか。

2

次に権力の正統性を保障する宗教の機能という点について述べます。室町末期、吉田（卜部）兼俱（1435－1511）によって提唱された吉田神道は代々当主をカミとして祀ることに特色がありました。それまで菅原道真のように崇り怖れて人をカミと祀った例はありますが、それまで死の直後から人をカミとまつる儀礼はこの吉田神道の儀礼以外にはなかったといわれています。その先例は豊臣秀吉で、彼は吉田神道によって死後＜豊国大明神＞になりました。

元和2年（1616）4月17日、家康は駿府城において75年の生涯を閉じます。その夜、柩は久能山に運ばれ、19日には神龍院梵舜のもと吉田神道によって埋葬されました。これによって秀吉と同格の神になったことになります。そして翌年その神柩は日光へと移遷され、天海によって山王一実神道によって祀られるわけです。元和3年4月4日、日光座禅院に入った神霊は、8日奥院に移され、天海によって五眼具足の印と真言が伝授され、されに11日後には塔柱灌頂 鎮座深秘式、三種神器秘印明が修されます。これらの儀式は、天皇の即位灌頂のさいに行われた秘儀であるといえます。つまり家康は日光において天皇と同等、あるいはそれ以上の神霊として祀られたと解するべきなのでしょう。

天海が山王一実神道にもとづいておこなった＜霊的クーデター＞とも言うべき操作は、マセ教授のおっしゃるように権力の正統性を保障するという機能を発揮した事例といえることができるでしょう。

ところで、マセ教授は「山王神道は天台宗によって厳しく管理統制されていた」と述べられましたが、それではなぜ社会に表面化する事件を巻き起こすほど、＜異端＞の教義がこの教派から頻出したのでしょうか。また＜正統＞か＜異端＞かという観点でみれば、天海こそ＜異端＞なのではないかと思われまます。

3

次に私の疑問は、思想事件の分析から、武士階級の神道にかんする関心の所在や要求ができるかどうかということです。マセ教授は「多くの武士は神道に無感心」とのべられました。近年紹介された『草袂』は名古屋藩士のしるした随筆です。このなかに16項目をあげて、熱田神宮の徳目をあげています。「飲酒の癖が直った」「夫婦仲が円満になった」など、すべて風聞による他愛のない現世利益や因果応報のはなしの集成です。一般の武士たちは神道コスモロジーや秘儀に無関心な一方で、卑近な世事や欲求については、神道に大きな関心を寄せていたのではないのでしょうか。神道への関心を明確化するのであれば、このような文献も考察の対象にすべきではないかということです。

以上＜異教徒＞の偏見を交えた質問で、多くはまだご発表を正確に理解していないためのものなのでしょうが、的外れなものは無視していただき、ご回答いただけるものだけお教えいただければありがたく存じます。